

幼児教育の独自性はどこにあるのか(6)

矢野 智司

生命論と幼児教育の現在

一年間続いたこの連載も今回で最後になります。

これまで連載のなかで、子どもが生命的な体験をすることの大切さを強調してきましたが、それは子どもが生活習慣を学習することの大切さ、発達することの重要性を否定したいからではありません。ここでは、これまでの話からもう一步踏み込んで、幼児教育において生命論を強調する理由を考えてみたいと思います。そしてそこから、この連載の主題で

あった幼児教育の独自性とはなにかについて明らかにしたいと思います。

教育には、さまざまな経験をして、認識能力や道徳性や社会性を高め一人前の人間になることと、遊びに代表されるように、有用なあり方を破壊することとで生命に触れることとの両方が必要です。第二回の連載のときには、このことを高く人間を目指すことと深く動物になること（生命に触れること）、こ

の振幅をよりダイナミックに高く深く実現することが、教育のなすべきことだと述べました。前者については、あらためて説明の必要もないと思います。後者については教育関係者においても十分に理解されているわけではありません。

後者の例として、連載の第一回で遊びを取りあげたことを思い出してください。そこでは、遊びは自分と世界との境界線が溶けてしまい、子どもが全体的に世界とかわり生命に触れる溶解体験だといいました。このような自由で喜びに満ちた体験は、誰もが遊びのなかでしておきながら、このことの大切さをいざ言葉でもって説明しようとする、なかなか簡単なことではありません。

幼稚園の創始者フレーベルも、一人前の人間となることと、人間を超えて生命に触れることの二つの方向を、恩物と遊びによって同時に実現しようとしていました。しかし、幼児教育においても、この後者の生命論の側面は、子どもにもそして保育者にも実感

されているにもかかわらず、言葉に言い表すことが困難なことから、現在では理論的にも実践的にも力をもっていない。フレーベルは、そのことを「生の合一」という言葉で言い表しましたが、その言葉の意味が実感できるフレーベルのサークルの人以外にはわけのわからないものでした。そのためフレーベルの教育思想は、まだ人間の科学が十分に発展していなかった時代の過去の思想と見なされることになりました。

幼児教育で、生命論的な見方が力を失ったのは、いくつかの理由を考えることができます。一つは、幼児の教育にたいして発言してきた教育学や発達心理学といった学問が、生命論を欠いていたことです。それには理由があります。戦前戦中の国家主義的な非合理的な教育学への反省から出発した戦後の教育学や発達心理学は、科学的に実証可能な経験を重視したため、外側から観察し評価することのできる子どものさまざまな能力や技能の発達に関心を向

けることになりました。

また、社会全体の世俗化が進み、有用性を中心とした価値観がさまざまな領域に広がっていきましたから、ますます教育のなかでも有用な能力や技能の発達に、両親のみならず保育者や教育研究者の関心が当てられてきました。今日では、家庭でのしつけの弱体化が問題になっています。このことは、子どもと日々接している保育者にとって焦眉の問題です。さらに、個々の子どもにはそれぞれ個別の課題があり、その課題を見つけて発達に向けて積極的にかわっていくことは、保育者にとって重要なことです。その課題に向けての働きかけの結果は、子どもの具体的な変化という形を取って現れます。このことで保育者は自分のかかわりの有用性と有効性を実感することができます。そのことは保育者に自分の仕事への喜びと誇りとを与えることでしょう。しかし、このような具体的な効果が目に見えにくい生命に触れる保育は、保育者にとっても自らの保育の

成果が実感しがたいものでしょう。

以上のような理由から、遊びに代表されるような生命に触れる体験もまた、役に立つかどうかの視点から、理解され評価され実践も方向づけられてきました。保育者も親も、そして教育学者も心理学者も、皆同じように口をそろえて、「遊びは発達にとって何の役に立つのか」と問います。そのように問われるとき、その問いはすでに答え方を方向づけます。そして、その答えによって、遊びは最初から発達のための手段のようにみなされます。このような問い方は子どもにかかわるあらゆる事柄に当てはめられています。教育関係者はいつもなににたいしても、「それは発達にとって何の役に立つのか」と問います。



たとえば、「動物を飼うことは発達にとってどのような意味があるのか」と問います。そうして動物を飼うことも教育の手段になります。保育者も親も、子どもの責任感を養うため、感情を豊かにするため、死の体験に触れられるために、といった理由で動物を飼い始めるのです。しかし、そのようなかわり方は、子どもと動物との出会いを損なう危険性をもっています。遊びもまた同じです。発達に限定された見方は、子どもの遊びを損なう可能性があります。

繰り返しますが、生活の大切さ、経験の大切さ、発達の重要性を否定しているわけではありません。倉橋惣三がフレーベルを批判し、生活をそして発達を幼児教育で重視したのは十分な理由があったことです。またそれ以降の保育や幼児教育が、そのことをさらに深めていったことには十分な理由があります。しかし、このことから直ちに生活や発達という観点が、幼児教育の全体をとらえるようになる

き、別の問題が生じてきます。保育者が、子どもと自然生命とのかかわりを理解できないようになる、工場の製品のように子どもを対象としてとらえることになるでしょう。工場がそうであるようにタイムスケジュールにしたがつて、つまり時間割にしたがつて、段階づけられた教材を子どもに提示し、有用な能力の発達を促すことになります。

目に見える現象や数量化できる結果に、保育者の関心が集まることで、目に見ることのできない出来事、また十年後にならないと現れてこないようなもの、さらには本人も気づかぬまま深く深く持続し、人生全体に通底する幸福感を作り出すようなもの、このようなものの重要性に気づかず、無視することになります。

簡単にそして短期間で成果の現れることのない生命にかかわる教育も、幼児教育の重要な課題であり、そのことがまた学校教育への準備としての役割でもあります。なによりこの生命に触れる教育は、

子どもの人生全体を支える教育です。子どもに生命と連なる幸福な根本的な存在の感覚を与えることは、幼児教育においてもっとも大切なことの一つです。

日々の保育では、保育者の関心が個々の子どもあるいは集団としての子どもの具体的な課題に集中することは当然です。しかし、そのような個々の子どもの行為、あるいは集団としての子どもの生活を生みだしているのは、システムとしての教育です。だからこそ教育システムのなかに「生命のフレール」が必要となります。日々の実践を作りだしている一番底にあるシステムのなかに、子どもがいきいきとした体験を深める教育が組み込まれていることが必要なのです。教育のシステムを変えると、子どもの動きが変わりますから、子どもの具体的な課題も変わります。個々の子どもとの問題行動に対応するのではなく、園内の幼児教育全体を子どもがより深く体験するためのシステムとして捉え直す必要があります。

ります。

一般に教育施設の教育的な使命は、それぞれの時代状況に生きる子どもの経験の総体のなかで変わってきます。学校の外が十分に遊戯で満ちた空間であつたときには、学校は教育の課題として発達に専念することが出来ます。生成としての教育は、学校の外で自然に実現できるものに任せておけばよかったのです。ある時期まで、学校の教育課題は発達に集中することができたのだと思います。しかし、今日のように学校の外で、ゲームやテレビといったバーチャルな経験が大きな比重を占めるようになり、身体を使つて集団で遊んだりする体験をもちにくくなっているときには、学校のなかで直接的な身体による体験が、さらに集団で何事かをなす体験が、不可欠となります。総合学習は、そのような子どもの深い体験の不足を学校で補う意味があるといえるでしょう。

そのようなことから考えると、学校教育の始ま

る以前の幼児教育における今日における独自性は、深い生命とのかかわりの体験の場をシステムとしてどのように作りだすかにあるように思います。そのような生命とのかかわりの体験をもたらし教育システムを通して、生活や発達の立て直しが始まるように考えます。しかし、このシステムを動かすのは保育者であり、その一人ひとりの保育者自身が、まずこのような生命の体験に深く開かれている必要があります。保育者には、発達の確かな概念とともに、生命の生き生きとしたイメージが不可欠なのです。保育者はより深い遊びへの導き手として、あるいはそのための環境を作りだす者として積極的な役割があります。

前回『ホビットの冒険』のなかでビルボが解いたなどなどの答えは「時間」でした。それはすべてのものを破壊し呑み込む時間です。しかし、保育者が生きる時間はこのようなすべてを呑み込む時間ではありません。チャペックが適切なイメージで描い

た、植物が花を咲かせ、木が大きくなる時間です。保育者の仕事は、子どもの人生のほんの短い時間にかかわるだけです。しかし、この短い期間は、子どもにとってもっとも大切な未来につながる一瞬一瞬からなる体験の時間です。だからこそこの短い間のかかわりは、なにものにも代えがたいほど貴重なのです。幼児教育の独自性とは、このような時間へのかかわりのうちにあるといえるのではないのでしょうか。

(京都大学)

参考文献

- 矢野智司『自己変容という物語―生成・贈与・教育』金子書房、二〇〇〇年
- 矢野智司『動物絵本をめぐる冒険―動物・人間学のレッスン』勁草書房、二〇〇二年